トラック3
＊明日なにをするか伝える説明パートであり、雛乃の想いを多少表に出すパートです
基本的には恥ずかしそうな、緊張している感じでお願いします。

戸を開ける

「兄さん…まだ、起きてる？」

「よかった、それならええと、その…、用ってほどのことじゃないんだけど
折角だし少しお話ししたいなぁと思って」

「だめ…かな？えへへ、良かったです」

戸を閉める

「となりいい？」

「なにもそんなあわあわしなくても
昔は毎日のように一緒にいたんだから」

「そうかな？従姉妹は家族みたいなものでしょ？だからほら、
となり失礼するよ」

もぞもぞ音

「はぁ〜〜、やっぱりこれが落ち着くなあ〜」

「兄さんはどう？ってまだ緊張してる
もう少し異性に耐性ないとこれからしんどいよ？」

「あっそうだ
兄さん、ちょっと手をこっちに
えいっ」

「待って、何も言わなかった私も悪いけどそんな暴れないでっ！」

「はぁ・・・ほんと、手を握っただけでこれなんて、将来お嫁さんが苦労しそうだ」

「あっ、寝るまではこのままだよ、そうでもしないと慣れるものも慣れないよ」

「まあ、こんな風に誰かと同じ布団で寝たり、
手をつなぐなんてそうそうないと思うけど」

「はいはいそうですねー」

「…にしても、帰ってきてから引っ張りだこで休んでないでしょ
叔母さんたちももう少しくらいゆっくりさせてあげたらいいのに」

「でもそれは兄さんが悪いんだよ
半年に一回しか連絡くれないから」

「私なんてその時ですら話せてないんだから
一番話したいのは私だよ」

「まぁでも、こうして顔を見れて安心した
普通に健康そうで本当よかったよ」

「それと東京での暮らしはどうなの？
住み心地とかそういうの」

「…なるほどねぇ、たしかに慣れたら便利そうだね、
都会ってでもたまにこっちが恋しくなると」

「それなら定期的に帰ってくればいいのに、ここは兄さんの家なんだし」

「でもなんだろう、そういうちょっと寂しがりやなところ、
相変わらずなんだね」

「母さんみたいな事言うな…って
そんなに？あれだけ一緒にいたから似てきちゃったのかもね」

「でも私はあんな口うるさくはなりたくないなぁ
お母さんは過保護すぎるよ」

「今回の帰省だって東京まで迎えに行くって言って聞かなくて
止めるの大変だったんだから」

「お母さん達もそうだけど、私も兄さんの事が心配なんだから
これからはもう少し頻繁に連絡してよ」

「それで…あの…ここからが本題で、
その、お昼間の縁談の事なんだけど…」

「率直に聞きます、どうでしたか！」

「いや、その…かなり美人さんだったし、
性格とか、お話ししていて楽しかったか…だとか」

「へぇ、ああそう…楽しかったんだ、それはなにより」
（拗ねる）

「えっなんですか？
少し気になっただけですけど別に怒ってないですけど!?」
「…ああっ成る程、昔の知り合いだったんだだから…」
「安心なんて、別に最初からなにも・・・心配してないし」
「ただ、兄さんはこの縁談について どう思ってるのかなって」
「兄さんが結婚するこもしれないんだよ？そりゃあ気になるよ」
「それで、受けるの？受けないの？」
「あーごめん、やっぱり何でもない…
今のは忘れてっ…て、え？受けないつもりでいる…の？」
「それで本当にいいの？
話は盛り上がったってさっき言ってたし、それに知り合いなんでしょ？」
「元々受けるつもりはなかったんだ、そっかぁ・・・
はぁ～（安堵）」
「断るついでに戻ってきたらとんとん拍子で話が進んでいった…
ふふっ叔母さんらしいですね」
「でも、兄さんが断るつもりっていうのわかったけど、
相手の人はどうなの？」
「もう二人で相談して決めたんだならいい…のかな？」
「あっ、なら明日ってもしかしてひま？」

「少し付き合ってほしい場所がいくつかあって・・・
兄さんも色々と見て回りたいと思うし、どうかな」

「そうだね・・・
まずはなにかお話しながらお散歩して、その後は山のほうにある川に行くとか？」

「小さい頃によく遊んだあの川、覚えてる？」

「都会に疲れた体には、
新鮮な空気を吸うのが一番！ってことでいい？」

「ほんと⁉
まあ実はもう行くところは決まってたんだけどね」

「それで最後は明日の花火大会に…
そうそう、あの毎年参加してた神社でしてるあれ
それを一緒に行きたいな…と」

「ああっともちろん二人でね！（焦った感じ）」

「良かった。それじゃあ明日の夕方あたりに家を出よっ
それで大丈夫で？」

「そんな楽しそう？
私もなんだかんだで久しぶりだからかな」

「昔は兄さんとよく一緒に行ってたけど、、私も受験とかで忙しくって…」

「一応進路は決まってて、
やりたいこともあるそれでもまだ悩んで…ほんとどうしよう」

「…当たって砕けろって…他人事だからって簡単にいうなあ…」

「でも…うん、そうだよね、やってみなきゃ分からないしね」

「うん？やりたい事は秘密近いうちに教えるから」

「大丈夫だって、お母さんや叔母さんには話してあるから
なにも心配いらないよ」

「あ…寝る前だったのに話し込んじゃったね、ごめん
何だか兄さんと話してると止まらなくなっちゃって…」

「明日も時間はあるし、そろそろ寝ようか」

「あー、えっとその…あっち向いて貰っても良い…？」

「冷静になったら凄く恥ずかしいことをしている気がして」

「ありがとう…じゃあ、お休みなさい」